

## 『私の信仰告白』

マリア・ローザ 大道 紀美子

私は主人に導かれてカトリック信者になりました。以来四十数年色々な事がありました。結婚当初から六年間に三回の婦人科手術、二回の流産、いたって健康に恵まれていた私は、こんなことになるとは思ってもいなかったで、神様により頼むこともせず悲惨な日々を送っていました。そんな私の傍らにいつも優しい主人がいて、体調の良い時は教会へ連れて行ってくれました。

三回目の手術の時、片方の卵巣を切除、医師から子供はあきらめるようにと宣告され、大変ショックを受けました。マタイ福音書六・二五―三四にありますように、「思い悩むな」の言葉に慰められ、私の気持ちも変えられ、私たち夫婦には神から別の使命が与えられているのだと思えました。幸い主人は健康ですし、私は看護師という神から与えられた素晴らしい仕事がありますので、その中で私た

ちの歩むべき道を示してくださいと信じ、主人と共に穏やかな日々を送っていました。

その後、体調も良くなり病院に勤めていました。自分が経験したことでは患者さんの不安、苦痛、悩みなど、私なりにその人の立場で接することが出来るようになり、神様の計らいに感謝しています。

数年後、待望の長男が誕生しました。決して順調ではなく、一日一日無事を祈りながらの十ヶ月でした。結婚してすぐ子供に恵まれていたら、このような感動は味わえなかったと思います。十二年目のことで、その喜びは言葉に言い尽くすことが出来ません。

神様は、私たち夫婦に奇跡を起こしてくださいました。子供中心の生活、私たち家族三人、夢のよう、主に感謝と賛美の日々でした。やがて孫二人にも恵まれ、家族六人で過ごす日々は最高でした。

ところが、二年前、私の留守中に突然主人は神様に召されてしまいました。医者知らずの六十六歳でした。まだまだ一緒にいてほし

かった。教会共同体の一員として働いてもらえる素晴らしい人でした。本人も突然の主の召し出しにびっくりしたことでしょう。

私は、自分の身に降りかかったこの事態を理解することが出来ないうまま、なぜ？どうして？と神様を恨みました。

でも、主人がいなくなつて一人暮らしになった私に、神様は多くのことを気付かせてくださいました。「知恵ある女は家庭を築く。無知な女は自分の手でそれをこわす」(箴言一四・二) 主人が以前のままこの世に生を受けていたら、私は相変わらずで結婚の誓いもすっかり忘れ、主人に対しての振る舞い、言動、自己中心的な私、無知な私は自分の手でそれを壊していたことを気付かせてもらい、罪の深さを知りました。今までの自分は何をしていたんだろう？過去を消すことが出来るなら消して、新しく出直したい気持ちです。悔やまれてなりません。

こんな私の傍らに神様、そして主人がいつも一緒にいて、憐れみ

をもって気付かせて、いま、回心へと導いてくださっていることを実感しております。この悲しい時、淋しい時に初めて心を開くことが出来ました。

神様のなさる事に偽りは無い、私たちにどんな事態が起きてもやがて希望と喜びに替えてくださいます。この年齢になり、恥ずかしいことですが、本棚の飾り物であった聖書も開くようになり、黙想する時間が与えられました。神様は慈しみをもって私を呼び、語りかけ育んでくださっています。一人ではない、子供、孫、兄弟、親友、隣人、そして身近に教会の共同体、それが私の家族とと思っています。

いま、こうして多くの人に支えられ、豊かなお恵みをいただき、キリストのうちに生かされていることを感謝いたしております。

最後に、聖アウグスチノの告白より、

「古く、そして新しい美よ  
遅すぎました  
あなたを愛するのが  
あまりにも遅すぎました